

## 野村胡堂・あらえびすの家族と神谷美恵子

箱石 匡行\*

(2004年1月29日受理)

Masayuki HAKOISHI

The Family of Kodo=Araebisu NOMURA and Mieko KAMIYA

### はじめに

最近、野村胡堂・あらえびすの家族と神谷美恵子（旧姓前田）との交流が注目されているように思われる。

神谷美恵子が野村胡堂・あらえびすの家族と親しい関係にあったことは、これまでも知られているところである。それにも関わらず、この交流が最近になって注目されているというのは、何故なのであろうか。

その契機となっているのは、2001年に、太田雄三の著書『喪失からの出発 神谷美恵子のこと』<sup>1)</sup>が出版されたことであろう。太田雄三はその著書を準備するにあたって、野村一彦の日記や神谷美恵子の未公開資料を閲読しており、その著書のなかには「野村一彦との『恋』」という章も収められているのである。

そしてその翌年（2002年）、野村一彦の姪に当たる住川 碧が、その日記の監修者となって、『会うことは目で愛し合うこと、会わずにいることは魂で愛し合うこと 神谷美恵子との日々』<sup>2)</sup>として、これを公刊したのである。この本は三つの内容から成っている。初めは、「野村一彦の日記」、次は、「兄妹ものがたり<断片録>」（松田瓊子）、最後は、「『一彦日記』に託されたもの」（住川 碧）、この三つである。

さらに、その翌年（2003年）、太田愛人が『神谷美恵子 若き心の旅』<sup>3)</sup>と『野村胡堂・あらえびすとその時代』<sup>4)</sup>を著している。『神谷美恵子 若き心の旅』は、若い時期の美恵子に影響を与えた人々との心の交流といったことをエッセイ風にした作品であり、その中には、「父のごとき楽の泉 あらえびす・野村胡堂——野村家の人々・1」「無言歌を奏でたかの人 野村一彦——野村家の人々・2」「夭折の少女小説家 松田瓊子——野村家の人々・3」という章が収められている。また、『野村胡堂・あらえびすとその時代』には、「胡堂・あらえびすをめぐる環——松田瓊子と神谷美恵子——」という章が設けられているのである。

それでは、野村胡堂・あらえびすの家族と神谷美恵子との交流とは、一体、どのようなものだった

\*岩手大学教育学部

のであろうか。また神谷美恵子は野村胡堂夫人ハナから宮沢賢治の存在を教えられ、賢治の生き方やその文学的世界に共感の念を心に抱いているように思われるが、その共感の念とは、どのようなものなのであろうか。こうしたことについて、これから考えてみることにしたい。

### 1 野村胡堂・あらえびすの家族と神谷美恵子の交流

神谷美恵子が野村胡堂・あらえびす夫妻と親しい交わりをもっていたことは、彼女の著作集に親しんできた人たちには知られていたところであろう。それというのも、『神谷美恵子著作集 別巻』「人と仕事」<sup>5)</sup>の中には「神谷美恵子アルバム」と題された写真集が収められており、野村胡堂と一緒に写っている写真や胡堂夫人ハナとの写真が含まれているからである。

まず、「軽井沢の山荘で 野村胡堂と 1935頃」、そして「軽井沢にて 野村胡堂夫人と 1937 (23歳)」という説明の付いた写真が見出される。前者は、腰をかがめている野村胡堂の下で笑みを浮かべた美恵子が座っている写真である。そして後者は、山荘の縁側だろうか、ガラス戸に近い場所に置かれたソファに座って編み物をしているハナ夫人のそばで、穏やかな微笑みを浮かべた美恵子がブラウスとスカート姿で縁側に座っているというものである。

写真といえば、この著作集に付されている『月報』にも、野村胡堂の子供たちと一緒に写っている写真が収められているのである。『神谷美恵子著作集 2』「人間をみつめて」<sup>6)</sup>に付された「月報 (3)」には、三葉の写真が収められている。そのなかの一葉には、美恵子とその兄妹そして友人たち、あわせて七人がそれぞれ自転車に跨っている様子が写っている。「軽井沢和美峠にて 1934年8月」と撮影の場所と年月が記されてある。その七人のなかには、野村胡堂の三女稔子（後の松田智雄夫人）も入っているのである。こうした写真を見ていると、前田美恵子の家族と野村胡堂の家族とが、家族ぐるみで交際していたことが理解されるのである。

さらに、『神谷美恵子著作集』に収められている日記に目を通して見ると、前田美恵子と野村胡堂・あらえびすの家族との交わりについての記載が含まれているのである。その幾つかを見ていくことにしよう。『神谷美恵子著作集 10』「日記・書簡集」には、次のような記事が見出される。

1940年7月8日（月）

「横浜着。ひよろひよろの寿男が来ていた。母上もやつれて見える。野村さんの御三人も来て下さる。父上のおやつれ様に涙を催す。

これより廿日軽井沢へ来る迄荷物整理、おみやげ整理、ごあいさつまわりと家へのお客様接待に忙殺される。浦口氏、上高井戸（野村家及び叔父様）三鷹、寺尾先生（お家と厚生会）淑子さん、吉岡先生等へ行く。医専は、十月二学期から好きな学科にだけ出ればよい事になる。」<sup>7)</sup>

『神谷美恵子著作集 補巻1』は、「若き日の日記」と題されている。この巻には、「野村家」そして「野村さん」という表記が数カ所に見出される。また野村家とはっきり表示されていないが、「N家」という表記が3ヶ所ほど見出される。これは、記述されている内容からみて、野村家を示すものである。さらに「瓊ちゃん」および「Kちゃん」という表記も見られるのである。これらを見ていくと、野村胡堂の家族と前田美恵子との間に親しい関係があったことが理解されて来るであろう。

1942年6月16日（火）晴

「朝だけでかえる。ピアノ練習二時間、郡司さん五時半頃見えて七時頃まで、野村さんへお電話して私たちの弾くビゼーの『アルルの女』のレコードをきかして頂くようお願いする。」<sup>8)</sup>

同年6月21日（日）晴

「朝から野村家へ郡司さんと連れ立って、うかがいビゼーの『アルルの女』やショパン、ドビュッシーなどのレコードをきかせて頂き、おひるを御馳走になり、小父様と三時頃までお話してかえる。」<sup>9)</sup>

同年11月15日（日）

「きょう午後、正ちゃん、耐ちゃん、野村小父様見ゆ。野村小父様は昔ながらの暖かさで『また来なさい。あんたが来ると家中が明るくなる』と言われた。」<sup>10)</sup>

1943年1月2日（土）

「午後、上高井戸に義ちゃんと野村家を訪問。義ちゃん思いのほか元気。たんぼ道を着飾った田舎の人たちがぞろぞろ歩いていた。」<sup>11)</sup>

同年12月26日（日）

「Nより拝借の『宮沢賢治』（佐藤隆房著）を読了。深く感銘する。

ミンナニデクノボウトヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

ソウイウモノニ

ワタシハ

ナリタイ

という言葉で終る詩が彼の全人格全生涯をよく現わしている。彼の結婚観、仕事観にも打たれた。」<sup>12)</sup>

1944年4月3日（月）晴

「帰り四時頃、高井戸のN家へ伺う。小父様は神経痛、小母様もやつれられ、揃ってめっきり老けられた。ああもう私たちのほうがおいたわり申し上げべき時代がめぐって来たか、とこの春の日に、秋の落葉の音を聞く心地して、ぼんやりともの思いしつつ帰って来た。」<sup>13)</sup>

同年7月22日（土）

「Schopenhauer: Über Religion [宗教について] Spranger: Lebensformen [生の諸形態] 等を読んでい。試験中は瓊ちゃんの本とアミエルの日記を何度も読み直した。また例の通り詩を読み散らし試験を終る頃には勉強机の傍には詩集がうず高かった。」<sup>14)</sup>

文中の「瓊ちゃん」とは、野村胡堂の次女瓊子を指すのであろう。

同年7月28日（金）

「午後から上高井戸へN家を訪ねる。お二人とも瘦せて居られた。昔ながらのお二人ではあるけれど、Kちゃんのいた時のような『夢のマジック』ははや消え失せた。結局、私がひとり心の奥底でひそか

に夢見つづけているのかも知れない。“Nur das Metaphysische macht selig, nicht das Historische”[浄福とは歴史的なものにあらず、ただ形而上学的なもののあるのみ]というフィヒテの言は宗教に限らず何事に就いてもそうだ。<sup>15)</sup>

この中の「Kちゃん」とは、野村瓊子のことであろう。

1945年7月25日(水)

「今朝はこちらでも久しぶりの晴だという。八時までぐっすり寝て、それから美味しい朝飯、持って来た本の整理、居ない間に届いていた本や書きものの整理、それからお隣へ行き、のんちゃんと遊んだり小父さま小母さまとお話したり、おくにのお餅を御馳走になったり、お隣の畑も、うちの畑も作物が見事に伸びた。愛する人々がこのまま平和に、あまりひどい無理なくして生活を続けていてくださるように！」<sup>16)</sup>

この中には、明確に野村家といった表現はないが、記されているのは、軽井沢での生活の様子、隣家野村家へ遊びに行つての様子であろう。「おくにのお餅」というのは、胡堂夫妻の郷里岩手県紫波町から送られてきたお餅なのであろうか。紫波町は農業が盛んで、餅米では、現在、国内第一の生産高を誇る農村である。

以上、『神谷美恵子著作集 補巻1』「若き日の日記」を取り上げて、この中に記されている野村家との交わりといったことを見てきた。野村家と美恵子とが親しい交わりをもっていることがよく示されているといつてよいであろう。

## 2 神谷美恵子の喪失体験——『生きがいについて』に見られる〈奇妙な記述〉——

1966年(昭和41年)、神谷美恵子の作品『生きがいについて』<sup>17)</sup>が出版された。これは名著といわれるものである。その中に、奇妙な記述が見出されるのである。

「五 生きがいをうばい去るもの」と題された章は、「生存の根底にあるもの」「運命ということ」「難病にかかること」「愛する者に死なれること」「人生への夢がこわれること」「罪を犯したこと」「死に直面すること」という五つの節を含んでいる。ここで取り上げるのは、そのうちの第四節「愛する者に死なれること」である。神谷美恵子は、われわれの生きがいをうばい去るものの要因の一つとして「愛する者に死なれること」を挙げているが、その節の初めに、キリスト教伝道者であった藤井武がその夫人を死によって失った際に歌った詩「<sup>こひつじ</sup>羔の婚姻」を引用している。それに続いて、神谷美恵子は次のように記している。

「次に将来を共にするはずであった青年に死なれた娘の手記から引いてみよう。

『ガラガラ。突然おそろしい音をたてて大地は足もとからくずれ落ち、重い空がその中にめりこんだ。私は思わず両手で顔を覆い、道のまん中にへたへたとしゃがみこんだ。底知れぬ闇の中に無限に転落して行く。彼は逝き、それとともに私も今まで生きて来たこの生命を失った。もう決して、決して、人生は私にとって再びもとのとおりにかはらないであろう。ああ、これから私はどういう風に、何のために生きて行ったらよいのであろうか。』<sup>18)</sup>

ここに示されているのは、「愛の共同世界が崩れ去ってしまった」<sup>19)</sup>時に、われわれが直面する様

相である、といってよいであろう。そのような時に、暗黒の闇が残された者の心の世界を覆い、「まっくろに塗りつぶしてしまう」<sup>20)</sup>のである。神谷美恵子のこのような表現は決して比喩的なものではない。残された者は、文字通り、暗い闇の世界に遺棄されているのである。

いま、ここに引いた文章とその内容について、私が〈奇妙な記述〉というのは、この引用について、出典が明記されていないからである。藤井武の「<sup>こひつし</sup>羔の婚姻」という作品が、初めに引用されてあって、これについては、明確に出典が記されている。それに対して、「将来を共にするはずであった青年に死なれた娘の手記」については、どのような著書あるいは資料からの引用なのか、まったく示されていないのである。

この『生きがいについて』という作品は、巻末に詳細な「引用文献」も示されており、学術的な専門書に準じたスタイルが採られている。それだけに、私がいま問題にしている箇所については、その典拠が示されていないのは、奇妙と言わざるを得ないのである。〈奇妙な記述〉というのは、こうした理由からのことなのである。

ところで、この「娘」すなわち「将来を共にするはずであった青年に死なれた娘」とは、他ならぬ神谷美恵子であったことが、2001年に太田雄三が著した作品『喪失からの出発 神谷美恵子のこと』によって示されたのである。その根拠として、太田雄三は、神谷美恵子の手記から次の二カ所を引用している。

「五年前の今日のあの天地ががらがら崩れ落ちるような感じが日に何度もよみがへって胸をしめつけた。(1939年1月28日付の手記)

彼の死に出逢ったときの、あのガラガラすべてがくづれる様な感じ——それがわたしの人生の様だ。(1940年1月17日付の手記)」<sup>21)</sup>

この引用文を『生きがいについて』における文章と比較すれば、そこにはっきりとした共通性が見出されるのである。

そして野村一彦と神谷美恵子との心の触れ合い、心の交わりについては、太田雄三の著書の「4 野村一彦との『恋』——喪失の衝撃とその持続——」に詳細に記述されている。二人の関係について、太田雄三は、こう述べている。「神谷と野村一彦は別に交際したわけでもなく、二人の関係は現実主義者の眼にはあっけないほど何もなく映る関係であった。」<sup>22)</sup>

ところで、太田雄三はこうした記述を行うに当たって、野村一彦の日記(当時、未公開)を閲読しているが、その後、この日記が公刊されたのである。先に述べておいたように、野村一彦著、住川碧監修『会うことは目で愛し合うこと、会わずにいることは魂で愛し合うこと 神谷美恵子との日々』が、それである。さらに、太田愛人は『神谷美恵子 若きころの旅』を、そして『野村胡堂・あらえびすとその時代』を著していることも、上に述べた通りである。こうした作品によって、われわれは野村一彦と神谷美恵子との関係がどのようなものであったのかを知ることが出来るのである。

### 3 神谷美恵子と宮澤賢治——賢治への共感——

神谷美恵子が宮澤賢治という作家・詩人の存在を知るのは、野村胡堂・あらえびすの妻ハナを通してのことであるという<sup>23)</sup>。そして野村(旧姓橋本)ハナは、宮澤家と親戚関係にあるという。藤倉四郎はその著書『カタクリの群れ咲く頃の 野村胡堂・あらえびす夫人ハナ』の中で次のように述べて

いる。

「宮沢賢治。ハナは思いがけず、おばに連れられて誕生の祝いに行っている。血はつながっていないが、橋本家とは遠い親戚になる。」<sup>24)</sup>

してみれば、神谷美恵子が宮沢賢治について、ハナ夫人を通して知ったということは、確かにうなずける話である。

われわれは、先に『生きがいについて』の中の「生きがいをうばい去るもの」という章について見たが、そのなかの「愛する者に死なれること」という節の末尾には、宮沢賢治の話が記されているのである。

最後の段落は次のような文章で始まっている。

「しかしやき場で骨を拾うとき、骨壺をかかえて帰るとき、墓の前にたたずむとき、愛する者の存在がただそこにあるものだけになってしまったとはどうしても思えない。のこされた者の心は故人の姿を求めて、理性とは無関係にあてどもなく、宇宙のはてばてまで探しまわる。」<sup>25)</sup>

そしてこの節の最後の文が次のように記されているのである。

「死者の世界と生者の世界との境界がまさに突破されかけているような印象を残すものとして、宮沢賢治が妹の死を歌った一連の詩、とくに『宗谷挽歌』があげられる。」<sup>26)</sup>

ここで神谷美恵子は宮沢賢治へ共感の念を示している。それは愛する者の死を巡ってのことである。おそらく神谷美恵子は、賢治がその妹トシの死に遭遇して歌った詩に、野村一彦の死という自らの喪失体験を重ね合わせているのではないかと考えられるのである。

神谷美恵子の宮沢賢治への共感というものは、おそらく神谷美恵子の人間観における最も基本的なものに基づくと言えるのではないのだろうか。そしてそれは<受苦せる人間>への共感とでも言えるものではあるまいか。

神谷美恵子が宮沢賢治の作品に親しんでいる様子は、その日記のなかに見出すことができる。その例として、次のような記述を引用することが出来るであろう。

1944年6月10日（土）

「Yさんから借りて宮沢賢治の童話『銀河鉄道の夜』を読んでいる。光の水を浴びている感じ。」<sup>27)</sup>

神谷美恵子の宮沢賢治に対する共感、これ以外のことについても見出すことができる。宮沢賢治の生き方そのものに神谷美恵子は共感を示しているのである。それは賢治が独身であったということである。野村一彦を病に失った前田美恵子は、生涯を通して独身を通すということも考えていたようである。独身で居ること、結婚しないということ、このことに関わっても、前田美恵子は宮沢賢治の生き方に共鳴しているように思われるのである。日記には、このことに関連する記述が多いように思われる。

それは、たとえば、次のような日記の文章に示されている。

1944年1月2日（日）

「昨日言ったような行動と血と涙をきょう読み終えた宮沢賢治に於て見出す。日本にかかる人物の生まれし事のうれしさ、ほこらしさ力強さ。しかも何と日本人らしい歩み方であろう。

『世界ぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない』

『世界に対する大いなる希願をまず起せ』

『つよくたく生活せよ、苦難を避けず直進せよ』

『いまやわれらは新たにただしき道を行き、われらの美をば創らねばならぬ』

以上のような言葉をよみ、宮沢賢治の生活の跡を辿って自分のインチキさ、不徹底さを耐え難いほど恥ずかしく感じた。何とかして自分のインチキ性と徹底的に戦い、『苦難を避けずに直進』出来るよう今年に努力しよう。殊に今年に卒業して、その後の道を決めねばならないのだから重要だ。

そして宮沢先生の言うとおりに、自分の精力の一滴たりとおろそかに費やさぬこと。」<sup>28)</sup>

1944年6月6日（火）

「ゆうべ床の中で『宮沢賢治素描』を読んであの人の独身をいいなと思った。人類愛と学問と芸術とに一切の力を昇華しつくしてしまおうとするゆき方は、それがあまりひどい無理や破綻や浪費なしになされ得るものならば、そうして、そうした方面で、その人間の与えられている天賦が並々ならぬものであるならば、理想的な道の一つなのかも知れぬ。彼が Geschlec[h]tstrieb [性欲] を克服するために一晩中牧場を歩きまわって来た時の態度や言葉に、一つの透徹した信念とそれに基く問題の解決を見る心地がする。彼はG. [性] の事についても広く読み深く考えたという。正々堂々とこの問題に取り組んで、自らの態度を決めたのだ。そうして人間として何等奇形に陥ることなく、自分のあらゆる力を使命にそそぎつくす道を歩み得たのだ。

私にもこの道を歩むことが許されたら！と思う。」<sup>29)</sup>

1945年12月2日（日）

「頭を剃って尼になったクリスチャンがあるそうだが私もそんな事がしたい。蓮月はそのようにして言いよる男たちを斥けたと言う。私にもそれだけの強さがなくては駄目だ。宮沢賢治の女難に対する態度を学べ。皆それ相応の苦心をしているではないか。『軛』を運命と考えるか、恩恵と考えるか、自己の分不相応な理想と考えるか、あるいはたたかいとるべき課題と考えるか、その時の気分によってさまざまである。しかし結局は、自己の使命という積極的な方面から割出されねばならぬ事であろう。少なくとも今まで自らえらびとった道と、その当然の——覚悟の上である筈の——結果について眩くべきではない。ただ恐ろしいのは知らず知らず人を誘惑してしまう私という人間の、構成である。男性に対するわなたる自分である。こればかりはどうしたらよいのか分らない。ただみ前にひれ伏して御許しを御導きを祈るばかりである。」<sup>30)</sup>

また、日付は前後するが、「1945年1月7日（日）晴」の日記の中にも、宮澤賢治の名が見られる。

「(スピノザ? ニーチェ、キェルケゴール、パスカル、カント、宮沢賢治、ナイチンゲールは独身であった。)」<sup>31)</sup>

このように、神谷美恵子には、宮澤賢治が生涯独身で過ごしたことへの共感の念とでも言うべきも

のが見られるのである。しかし美恵子は、決して結婚を否定しているわけではない。後に、神谷宣郎と結婚することになるが、そのことについて、「1946年5月30日（木）」付けの日記には次のような記述が見出されるのである。

「私はこれ以上独りであるべき人間でないこと、Nとの結婚は全く大きな恩恵である事をはっきりと見定めることが出来た。彼との結婚は chaos [混沌] なる私に秩序と統一とを与えてくれるだろう。それが私に一ぱん必要な事だ。生命力の氾濫する私には制約が要る。」<sup>32)</sup>

旧約聖書に記されているように、「人がひとりであるのは良くない」というべきなのであろう。人はそれぞれ自分に「ふさわしい助け手」が必要なのである。前田美恵子にとって、それが神谷宣郎の存在だったのである。

たしかに、人間は一個人として充足できる存在ではないのであろう。人間が、たんなる動物としてではなく、人間として存在するためにも、他者の存在が不可欠なのである。してみれば、人間は不完全な存在であると言わなければならない訳であろう。人間は、抽象的な人間性として存在するのではなく、まず男として、あるいは女として存在するのである。そしてその生物学的レベルの存在に基づいて、われわれは自らの人間的（つまり人格的）実存の世界を形成するのである。そのような人間の世界を生きるためにも、人間は他者の存在を必要としていると言わなければならないのである。

#### 4 <受苦せる人間>への共感

神谷美恵子の生涯と仕事を考えるとき、そこに一貫して<受苦せる人間>への共感というべきものが見出される、と言えるように思われる。これには、おそらく次のような二つの要因があるに違いない。

第一は、神谷美恵子自身が当時、死病として恐れられていた結核に罹患し、幸運にも快癒したという体験であろう。他の療友たちは病のために逝ったのに、幸いにして自分だけが健康を取り戻すことが出来たということに、神谷美恵子は一種の負い目を感じていたように思われるのである。

そして第二は、らい病に感染した人たちの姿を眼にして、神谷美恵子は大きな衝撃を受けたということなのである。

そして神谷美恵子が自らに問いかける問い、<なぜ、自分ではなく、あなたなのか>という問いは、自己の存在そのものに対する問いであって、これは哲学の最も根本的な問いであると言わなければならないだろうか。それは、<なぜ、私はこうで在って、別様ではないのか>という問い、<なぜ、世界はこのように存在し、別様に存在するのではないのか>という根源的な驚きというべきものではないのだろうか。

「なぜある人が不運にみまわれ、なぜこちらがそれを免れたのか、ということについて、ほんとうの説明はない。」<sup>33)</sup>

「なんらかの意味で幸運に恵まれた人、生存競争に勝った人は、不幸な人、不運な人に対して負い目を持っているのだと思う。どうしてこちらでなくあちらが不幸や不運にみまわれているのか。この疑問がつねに心に生じるのが当然であろう。」<sup>34)</sup>

「自分だけ、自分の家族だけがしあわせになればよい、という考えだけでは、どう考えても片手おちだと思う。だいいち、どこに自分や自分の家族が災難にみまわれないという保証があるのか。いのちのもろさ、はかなさにおいて、私たち人間はみな結ばれているのだ。」<sup>35)</sup>

神谷美恵子は、こうした考えを控えめに「素朴な認識」<sup>36)</sup>と表現しているが、これは、〈素朴な〉とって済まされるものではないであろう。人間は決して単独では存在し得ないということ、他者との結びつきは、〈いのちのもろさ、はかなさ〉そのもののレベルにおいてなのだ、という認識は、人間の存在を理解する上で、重要な意味を持つものであると言うべきであろう。人間は、生命という最も根底的なレベルにおいて〈傷つきやすい〉(vulnérable) 存在であるという訳なのである。〈傷つきやすい〉ということは、人格的なレベルについても言えることであるはずなのである。

神谷美恵子が叔父金沢常雄とともにらい療養所に行き、そこで大きな衝撃を受けた。神谷は日記に、「患者さんたちの姿は大きなショックであった」<sup>37)</sup>と記し、さらに「私の存在そのものがゆさぶられるようであった」<sup>38)</sup>とも記している。

神谷は、自己の闘病経験を振り返りつつ、こう述べている、「ともかくも、多くの療友が死んで行った時代に、私はふしぎにも少しずつ治って行った。どうして私だけが、との考えがいつまでもつきまとった。」<sup>39)</sup>

「また松沢病院を見学したとき、心を病む人間というものの根源的な不幸に初めて目をひらかれたように思う。」<sup>40)</sup>

神谷恵美子の「らいの人に」と題する詩には、次のような言葉が記されている。

「なぜ私たちでなくあなたが？  
あなたは代って下さったのだ  
代って人としてあらゆるものをうばわれ  
地獄の責苦を悩みぬいて下さったのだ」<sup>41)</sup>

「ゆるして下さい らいの人よ  
浅く、かるく、生の海の面に浮びただよい  
そこはかたなく 神だの靈魂だのと  
きこえよいことばをあやつる私たちを」<sup>42)</sup>

神谷恵美子は自己の〈原体験〉について、次のように述べている。

「なぜ私たちでなくあなたが？  
あなたは代って下さったのだ

べつに理屈ではない。ただ、あまりにもむざんな姿に接するとき、心のどこかが切なさとしりぞきで一杯になる。おそらくこれは医師としての、また人間としての、原体験のようなものなのだろう。

心の病にせよ、からだの病にせよ、すべて病んでいる人に対する、この負い目の感情は、一生つきまとはなれないのかも知れない。」<sup>43)</sup>

われわれは、この文中にある「切なさとし訳なさ」という表現に注意する必要があるだろう。他者のあまりに無惨な姿に接したとき、神谷美恵子の心は「切なさとし訳なさで一杯になる」。「心のどこかが」と記されているが、<心そのものが>というべきであろう。決して、心の一部が、という訳ではないはずだからである。他者の無惨な姿を引き起こしたのは、決して神谷美恵子ではない。自分の責任ではないにも関わらず、そのことに「切なさとし訳なさ」で心が一杯になるのである。<私>がこうしてられるのは、<私>に代わって、<あなた>が、そんなにも無惨な姿になって下さったからだ、というのである。こうした考えは、レヴィナスの<身代わり> (substitution) という思想に通ずるものではないだろうか<sup>44)</sup>。

このような人間存在についての理解を根底にもっている神谷美恵子が、宮澤賢治の文学的世界に共鳴し、共感していることの意味は、あらためて考察することが必要であろう。

付記 小論は、岩手大学公開講座「石川啄木の世界」(第11回)における筆者の講義(2003年5月31日〔土〕)の草稿及び配付資料をもとに、作成されたものである。

## 註

- 1) 太田雄三『喪失からの出発 神谷美恵子のこと』(岩波書店、2001年11月)。
- 2) 野村一彦著、住川 碧監修『会うことは目で愛し合うこと、会わずにいることは魂で愛し合うこと 神谷美恵子との日々』(港の人=出版社、2202年11月)。
- 3) 太田愛人『神谷美恵子 若き心の旅』(河出書房新社、2003年2月)。
- 4) 太田愛人『野村胡堂・あらえびすとその時代』(教文館、2003年9月)。
- 5) 『神谷美恵子著作集 別巻』「人と仕事」(みすず書房、1983年、4月)。
- 6) 『神谷美恵子著作集 2』「人間をみつめて」(みすず書房、1980年、12月)。
- 7) 『神谷美恵子著作集 10』「日記・書簡集」(みすず書房、1982年11月)、25頁。
- 8) 『神谷美恵子著作集 補巻1』「若き日の日記」(1984年、12月)、31頁。
- 9) 同前、33頁。
- 10) 同前、52頁。
- 11) 同前、63頁。
- 12) 同前、142-143頁。
- 13) 同前、169頁。
- 14) 同前、190頁。
- 15) 同前、192頁。
- 16) 同前、317頁。
- 17) 神谷美恵子『生きがいについて』(みすず書房、1966年4月)。
- 18) 『神谷美恵子著作集 1』「生きがいについて」(みすず書房、1981年9月)、102頁。

- 19) 同前。
- 20) 同前。
- 21) 太田雄三、前掲書、10頁。
- 22) 同前。
- 23) 太田愛人『神谷美恵子 若き心の旅』、137頁。
- 24) 藤倉四郎『カタクリの群れ咲く頃の 野村胡堂・あらえびす夫人ハナ』(青蛙房、1999年2月)、31頁。
- 25) 『神谷美恵子著作集 1』、103頁。
- 26) 同前。
- 27) 『神谷美恵子著作集 補巻1』、186頁。
- 28) 『神谷美恵子著作集 10』、47頁。
- 29) 同前、57頁。
- 30) 同前、67頁。
- 31) 『神谷美恵子著作集 補巻1』、245頁。
- 32) 『神谷美恵子著作集 10』、80頁。
- 33) 『神谷美恵子著作集 2』(みすず書房、1980年12月)、63頁。
- 34) 同前。
- 35) 同前。
- 36) 同前、64頁。
- 37) 同前、127頁。
- 38) 同前。
- 39) 同前、129頁。
- 40) 同前、131頁。
- 41) 同前、133頁。
- 42) 同前。
- 43) 同前、134-135頁。
- 44) レヴィナスは、1968年に「身代わり」という表題の論文を発表している。〈身代わり〉という考えは、レヴィナス倫理学の中心的概念であるともいわれる。この概念については、箱石匡行『フランス現象学の系譜』(世界書院、1992年4月)、267-269頁、を参照されたい。